

2. 「大事な言葉を考えながら読み、想像を広げながら進んで読んだり書いたりできる学習」

（単元名：場面の様子を「デジタル紙しばい」でしようかいしよう

「ニャーゴ」 みやにし たつや 東京書籍第2学年下）

（1）指導のねらい

〈単元の目標〉

○登場人物の様子や言動を比べて読み、お話のよさやおもしろさを味わう。

- ・登場人物の会話や行動を基にし、想像を広げながらお話を楽しく読むことができる。
- ・おもしろい言葉や文を選び、その叙述を基に登場人物が思ったことを書き加え、「デジタル紙しばい」で話すことができる。
- ・自分の考えと比べながら友達の考えを聞き、いろいろな考え方があることに気付くことができる。

〈教材について〉

本教材文「ニャーゴ」は、ねこのたまが子ねずみたちを食べようとするが、子ねずみたちの意外な発言や、やさしさにふれることによって、ねこのたまが子ねずみたちを食べるのをあきらめるお話である。

本教材のしかけは、「食う一食われる」の関係が物語の展開とともに変容していくところである。「ねずみを食いたいお人よしの『ねこ』」と、「ねこの怖さを知らない無邪気な『子ねずみたち』」の間に生まれる「二者の気持ちのずれ」を楽しみながら食い違いを比較することができる。表現技法として、おもしろさのポイントとなっているのは、「食べてやる。」と直接的に表現せず、「ニャーゴ」という擬声語を使っているところである。これが、二者の気持ちのずれを生み出す大きな要因となって、素直な子ねずみたちによってあいさつと解釈され楽しく裏切られる。また、会話文、地の文、心内語が多いので、臨場感あふれる描写になっており、登場人物の行動や気持ちを比較することで場面の様子を想像豊に読むことができる教材である。

本教材「ニャーゴ」の場面の様子を『デジタル紙しばい』でしようかいしよう」では、本単元で付けたい力を「C 読むこと」の指導事項の中から以下の3点とする。

ウ. 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。

エ. 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。

オ. 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

これらの力を育むために場面の挿絵をタブレットで紙芝居仕立てにし、自分で考えた心内語を付け加えた「デジタル紙しばい」を紹介し合う活動を取り入れた。この活動を取り入れることによって、児童は場面に着目して登場人物の行動や気持ちを想像しながら読むことができると考えた。また、本単元では、教材文中の言葉を扱って以下のような思考力を高めることができるようにした。

着目させたい言葉

- 1・2場面：ニャーゴ（1回目）、少し顔を赤く
だれって…たまだ、何って、べつに。
- 3・4場面：ニャーゴ（2回目）、ひひひひ。
- 5・6場面：ニャーゴ（3回目）、ううん。

（資料① 着目させたい言葉と促したい思考力）

促したい思考力

場面と場面の登場人物のしたこと・言ったことを比較し、ねこと子ねずみの言動を意識できるようにする【順序】。その中で、特に、たまの会話文には人物の気持ちがわかる直接的な表現がないことから各場面での心内語を考える【理由付け】。

(2) 授業の実際

視点① 教材文分析について

○付けたい思考力と指導事項の系統

- ・比較・順序・理由付けの思考力を用いる。
- ・指導事項の系統を踏まえ、前単元と本単元、次単元の関連付けを図る。

○読みの課題

- ・初発の感想を生かし、学習課題を設定する。(興味、関心の高いもの・疑問)
- ・登場人物の行動の変化と場面の様子の関係をとらえる課題を設定する。

第Ⅰ次では、ワークシートを活用して、初発の感想を以下の内容に焦点化して書くことができるようにした。

- ①このお話には、だれがでていますか。
- ②このお話の中で、一番おもしろいと思ったり、心に残ったりしたところは、どこですか。
- ③なぜかな、不思議だな～、みんなと話し合ってみたいな。と思ったことを書きましょう。
- ④わからない言葉をそのまま書きぬきましょう。

ワークシートを用いて児童の興味、関心の高いもの・疑問を分類・整理しておくことで学習課題づくりがしやすくなった。児童は以下のようなところに着目して、感想を書いていた(資料②)。

設定：子ねずみが先生の話をかかないところ。(おもしろいから)

展開：1回目のニャーゴを子ねずみがいさつと思ったところ(先生話を聞いてないから)

たまが手をふりあげて出てくるけど、子ねずみの反応にとまどって顔が赤くなるからおもしろい。

山場：子ねずみがたまに、ももをあげたところ(子ねずみがやさしいから)

たまが子ねずみたちを食べようとしたのに食べなかったところがよかった。

結末：3回目のニャーゴの声が小さかったところ(ほっとした・おもしろいから)

(資料② 教材文ニャーゴにおける児童が興味・関心の高いところ)

多くの児童が山場や結末に関心をもっていた。児童の中には、「私がふしぎに思ったところはねこはももを大事そうにかかえたまま、『ニャーゴ』と小さな声で答えましたのところ。なぜなら、どこで、子ねずみの気持ちがつたわって、ねこが子ねずみたちを食べなくなったのか、みんなの意見を聞きたいからです。」と設定(ねこは子ねずみを食べる)と結末(ねこが子ねずみを食べなかった)のねこの様子を比較し、その変化に着目している様子も見られた。児童の感想(資料②)から以下の学習課題を位置づけ、Ⅱ次で課題解決を行うようにした。

Ⅱ次5時：1回目の「ニャーゴ」と言ったときのたまと子ねずみの思ったことを考えよう。

Ⅱ次6・7時：2回目の「ニャーゴ」と言ったときのたまと子ねずみの思ったことを考えよう。

Ⅱ次8時：4場面のたまが「ううん。」と言ってためいきをついたとき、たまは何を思っているのか考えよう。

(資料④ 初発の感想から位置付けた学習課題)

次に、登場人物の行動の変化と場面の様子の関係をとらえるためには、話の内容や展開を正確につかんでおくとともに、大事な言葉や文を見つけながら読むことが求められる。そこで、大事な言葉の意味を意識して、正確に読むことができるように、児童の発達段階を考慮し、物語文クイズ(アニメシオンゲーム)を取り入れることにした(資料⑤)。

このようにクイズにして、読みを深めるために必要な情報や物語の構成要素を意識して読めるように工夫することで、Ⅱ次における学習の基盤をつくることができた（資料⑤）。ゲーム性が読む意欲をかき立てるため、児童はすすんで教材文を読み返したり、話し合って内容を確

| | | | |
|---|--|---|--|
| <p>物語文クイズ (アニメーションゲーム)</p> <p>【めあて】 もんだいをいって、お話のたいがいがつかめているかたしめよう</p> | <p>1ねずみの先生はねこの顔を見たらどうしないといっていますか。</p> <p>•① あそびなさい。 •② 食べなさい。 •③ にげなさい。</p> | <p>2ねこの名前はなんですか。</p> <p>•① はま •② とら •③ たま</p> | <p>3ねこと ねずみは、なにをとり に いきますか。</p> <p>•① くり •② りんご •③ もも</p> |
| <p>4中心となる とうじょうじんぶつは ぜんぶで なん 人、出てきますか。</p> <p>•① 3人 •② 4人 •③ 5人</p> | <p>5 ねこと ねずみは、自分のことを なん と よんでいいますか。</p> <p>•①ねこ →おれ ねずみ →わたし •②ねこ →ぼく ねずみ →おれ •③ねこ →おれ ねずみ →ぼく</p> | <p>6物語の中で ねこは ニャーゴを 何回言っていますか。</p> <p>•① 3回 •② 6回 •③ 9回</p> | <p>7ねこは さいしよに ねずみを見たとき どうしようと思いましたか。</p> <p>•① つれてかえろうと思った。 •② 食べようと思った。 •③ 友だちになろうと思った。</p> |
| <p>8ねこは、ねずみから ももを なんこ もらいましたか。</p> <p>•① 3こ •② 4こ •③ 5こ</p> | <p>9「ためいき」は どん なときに出る「いき」でしょうか。</p> <p>•①がつかりしたとき •②うれしいとき •③(つかれて)力がぬけるとき •④まよっているとき •⑤思いどおりかないとき</p> | <p>10 なぜ、ねずみはねこからにげないといけないのですか。</p> <p>① ねこと友だちになるから。 ② ねことあそんではいけないから。 ③ ねこに食べられるから。</p> | <p>11 ふりかえろう：1～11のクイズで一番、むずかしかったもんだいはどれですか。</p> <p>もんだい()ばん りゆう</p> |

(資料⑤ 物語クイズ [アニメーションゲーム])

認したりして、話の大体をとらえることができた。一方、指導者は読みの習熟状況や語彙力をあらかじめつかむことができたため、その後の発問や学習支援などに生かしていくことができた。とくに、Ⅰ次4時では、「9『ためいき』はどんなときに出るいきでしょうか。」について、経験と結びつけて交流しておくことで、「ためいき」に対する言葉の意味を共有することができた。

視点② 交流について

○話し合い活動の目的（何のために）と内容（どんなことを）

- ・児童が楽しんで行い、付けた力を使ってみたいと感じることのできる言語活動を設定する。
- ・板書やノートを用いて、視覚的に学習活動の目的と内容を見通せるようにする。

○話し合い活動の形態や方法

- ・横や縦のペア交流を全体交流の前に取り入れるようにする。

○交流の場における発問や助言

- ・想像を広げるような発問・助言を工夫する。

第Ⅱ次の学習では、Ⅲ次の「デジタル紙しばい」づくりのために、ねこと子ねずみの叙述から心内語やその理由を話し合うことを意識できるように支援した。具体的な支援方法は、二つある。一つ目は、ねこと子ねずみの言動を対比できるようにした。（資料⑥・⑦）二つ目は、人物の叙述を色分けしてフラッシュカードにすることで、誰のどの言葉について、心内語を考えればよいかわかるようにした。（資料⑦）

叙述に番号を付けて人物の会話の順序を意識して、比較できるようにすることで、場面や心内語を想像しやすくしている。

たまこ
① ひげをひんと
させ
② 手をふり上げて
立っていた
ときとした
少し顔を赤くした
だれて……「まだ」
③ 「さうがうせたい」
④ その後で、ひげひ
ていっている日だ

子ねずみ
① 大きなおじさん
大きな声、へ
② ひっくりしたね
③ おじさんだあれ？
④ ここで何してるの？
「ここで、おじさん、ぼくたちの
かたが、いっしょに、ももを
とりに行こうよ」

上部が会話（叙述）と下部が心内語を対（つい）にすることで人物の気持ちや場面の移り変わりがとらえやすくなる。

（資料⑥ Ⅱ次6時：1回目の「ニャーゴ」と言ったときのたまと子ねずみの気持ちを考えようの板書）

第Ⅱ次6時：お話しの順に沿って、たまと子ねずみの言ったことやしたことの中でどう思っているかを考えることができるように発問した。児童は、物語クイズで繰り返し、教材文を読んでいるので、次時：第3場面の（うまい。でも、たくさん食べたらいけないぞ。おなかいっぱいになったら、こいつらが食べられなくなるからな。）というたまの言った独り言と関連付けて、心内語を考えていたと考察する。

ニャーゴ
めあて 二回目の「ニャーゴ」
たまと子ねずみの気持ち

たまこ
① ああ、
② 食べにくいなあ
③ かわく
④ かわく

子ねずみ
① やつこいつらを食
べられるぞ
② 子ねずみたち、
食べてやる
③ やつだ。食べられる
④ チャンスだ
⑤ おいそつだなあ。
⑥ このときが来るのを
楽しみにしていた。
⑦ ああ、
⑧ 食べにくいなあ
⑨ かわく
⑩ かわく

「楽しい」を強調することで、「楽しい」の中に、二者の気持ちのずれがあることがわかる

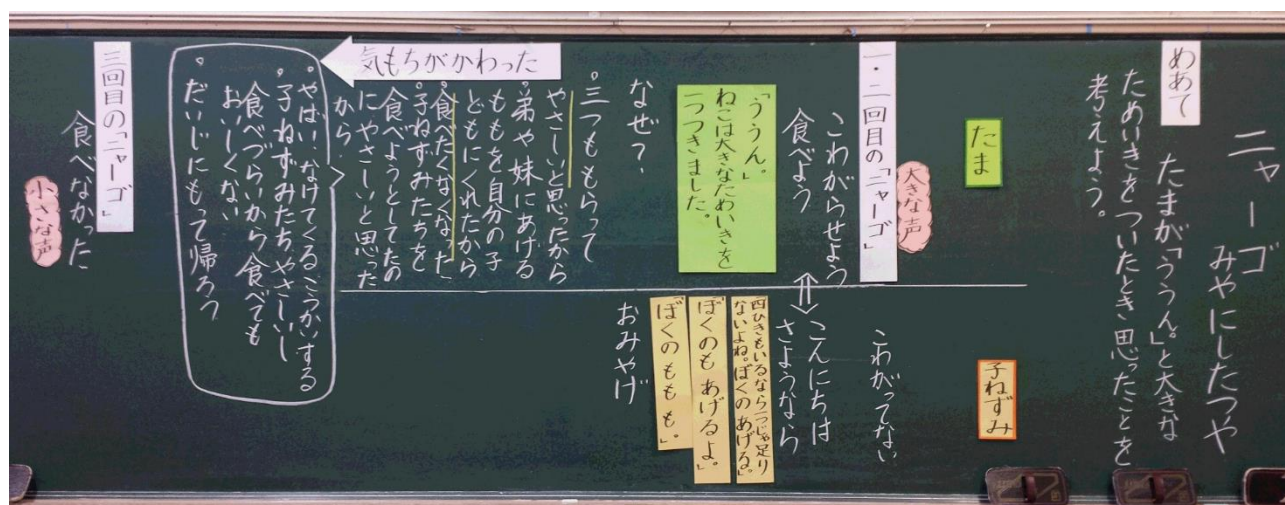
たまの叙述を緑色にしている。

子ねずみの叙述を橙色にしている。

（資料⑦ Ⅱ次7時：2回目の「ニャーゴ」と言ったときのたまと子ねずみの気もちを考えようの板書）

前時と同様、第Ⅱ次7時：たま（ねこ）とねずみの叙述や気持ちを上下で比較できるように板書した。板書を活用しながら、それぞれの人物の「楽しい」の思いに、どのような「ずれ」があるのか、問うようにした。児童は二者の気持ちの違いが視覚的にわかるので、「たま（ねこ）は『ニャーゴ』とさけんで、子ねずみたちをいよいよ食べようとした。それに対して、子ねずみたちが

あいさつの言葉だと勘違いしているのを読み取り、『あああ、食べにくいな。がつくり』と食べる気をそがれるような気持ち」になっていることを心内語で表現することができた（資料⑦）。



（資料⑧ Ⅱ次8時：たまが「ううん」とおおきなためいきをついたとき思ったことを考えようの板書）

第Ⅱ次第8時（本時）：授業の序盤では、まず、1・2回目と3回目のたまの「ニャーゴ」はどんな声、どんな気持ちで言ったかを発問し、鳴き声がどのように変わったのかを問うようにした【比較】。そうすることで、児童は『怖い声・子ねずみを食べようとした。』から『小さな声・子ねずみを食べなかった』に行動が変わったと応えることができた【順序】。次にどのあたりで、人物たま（ねこ）の気持ちが変わったのかを問うことで、中心となるためいきの「ううん」の叙述に児童の目を向けることができるようにした。教室側面の掲示物も併用して、学習課題をクラス全体で確認した。音読する前に、子ねずみが「ニャーゴ」をどのように（あいさつだと）認識していたのか確かめた。その後、「なぜ、たまはためいきをついたのかわかる場所を探しながら読みましょう。」とたまの気持ちの変化となる大事な叙述を意識して音読できるようにした。

授業の中盤：音読の後、ためいきをついた根拠になる文にサイドラインを引くように指示をした。多くの児童は「子ねずみがたまに、ももをあげる」叙述に線を引いた。その後、ノートに「ためいき」をした理由を書くようにした。自分の意見をノートに書いた後、ペアで交流をした。ペア交流の行うことで、違う考えの児童からは考えの広がり、同じ考えの児童からは考えの深まりを感じて、全体交流に参加することができていた（資料⑨）。

- ・ねずみたちは、たまに、やさしく「一つじゃ足りないよね、ぼくのもあげる。」「ぼくのもあげる。」「…（省略）」と言って、たまにももをあげたからたまは、ねずみたちが食べにくくなって、大きなためいきをついたと思いました。
- ・「あげるよ。」といってくれと、子ねずみたちをたべる気がなくなって、大きなためいきをついたと思います。
- ・たまが、子ねずみから三つも、ももをもらって、こんなにやさしい子ねずみたちを「たべられないぜ」っておもったからだとおもいます。
- ・子ねずみたちがこんなにやさしかったら、食べたらこうかいするから、しょうがないから、食べるのをやめようと思って、ためいきをついたと思います。

（資料⑨ Ⅱ次8時：「たまが「ううん」とおおきなためいきをついたとき」の児童の考えた理由）

授業の終盤：子ねずみを食べようとしていたたまと子ねずみの言動を比較して、子ねずみのやさしさに気づいたことや子ねずみがたまにではなく、たまの子どもにやさしくしてくれたことなどにより、たまの気持ちが変わっていったと、児童はとらえることができた（資料⑩）。

C1：たまが子ねずみにももを三つももらって、食べようとおもったことを後悔して、ためいきが出たと思います。

C2：たまはももをもらって、子ねずみを食べるか迷ったと思います。理由は…

C3：心が回転した！

C4：たまは、こんなにももをもらっていいのかな。と思った。

T：どうして「たまはこんなにもらっていいかな。」と思ったの。

C5：子ねずみは、たまの子どもにあげようと思ったから。

T：えっ！子ねずみはもともとだれにももをあげたかったのですか。

C6：弟や妹にあげるももを自分の子どもにくれたからです。

C7：たまは（子ねずみを食べようと思っていた）自分を振り返ってやさしいと思った。

（資料⑩ II次8時：逐語録たまが「ううん」といったときの心内語を考える）

児童の意見を掘り下げるように聞くことで、子ねずみのしたことと言った順序を整理できるようにして、考えを深めることができている。

第II次 9時：「ちいさな声でニャーゴといったたまの心の声を考えよう」においても、たまの「ためいき」の場面をふりかえることで、「ももをくれた子ねずみのやさしさ」や「子ねずみのやさしい声かけ」とたまの行動を比較できるようにした。その結果、たまの気持ちを一人一人の児童がたまに同化して想像することができた（資料⑪）。

- ・子ねずみの気持ちがこもったももだ。（大切にしないで）
- ・子どもたちと子ねずみたちといっしょにいたいな。
- ・食べなくてよかった。
- ・子ねずみたちの話を子どもたちにもしてやろう。
- ・せっくなかなかよくなったのに、つぎあうときは、わるものに思われるかも。

（資料⑪ II次9時：「ちいさな声でニャーゴといったたまの心の声を考えよう」の児童の考えた心内語）

視点③ 言語活動と評価について

○交流の場における評価

- ・毎時間、学習課題に対する、自分の考えを短い言葉でまとめることができるようにする。
- ・学習活動（主に交流）を振り返って、自分の考えの変容（深まり・広がり）に気付くことができるようにする。

○言語活動と思考力・判断力・表現力の評価

- ・考えをまとめた学習ノートや言語活動を通してできた成果物の中に付けたい力（比較・順序・理由付けなどの思考力）がどのように身に付いているかを指導者が評価をする。
- ・友達のノートや成果物でよいところを認め合えるようにする。

II次8時：「ためいき」の理由もノートに書いてから交流した。そのため、「心内語」を考えることができた。（資料⑫）

- ・オレ、子ねずみたちを食べようとしたのに、ももをくれたなんて、子ねずみはやさしいな。
- ・食べたら、きつこうかいするから、子ねずみをたべられないな。
- ・ねずみを食べようかな。食べないほうがいいかな。やさしいからやめよう。
- ・子ねずみの大事なももをオレの子どものためにもらっちゃった。帰ろう。
- ・子ねずみたちはやさしいからたべずらいな。食べてもおいしくないな。

（資料⑫ II次8時：児童の考えた心内語）

児童は生活経験と結びつけて、たまの「迷い・（仕方のない）あきらめ」などの葛藤を想像している。

心内語を考える活動を通して、大事な叙述を比較したり、理由付けをしたりする思考力が身に付いたといえる。

授業最後のふり返りでは、低学年における発達段階上、学習態度や意欲に関するもの、自分の頑張りを認めるものが多かった。自分の考えの変容においては、交流による広がりよりも自分自

- ・いつものFさんみたいにはっぴょうをしたのがうれしかったです。
- ・Fさんはわからない人にも教えてあげて、すごいなおもったから、わたしもがんばりたいです。
- ・たまおじさんの気持ちがあったので、よかったです。
- ・たまがためいきをつついた理由がよくわかりました。
- ・たまはこうかいして、食べない気持ちがすごくわかりました。
- ・Sさんのいけんをつなげたら、もっとすごい文しょうになりそうだと思う。
- ・たまになりきれたから、もっと、長いいけんを書きたい。

(資料⑬ Ⅱ次8時： 本時後の振り返り)

[illegible]

- ・1 班 T さんの（本当はせなかにのせたくないな。）という文がたまらしくていいと思いました。
[ももの木へ行く前の場面]
- ・2 班 F さんの（たまおじさんだいじょうぶかな。）という文から子ねずみがやさしいなとわかるからいいと思いました。[ももをあげる場面]
- ・3 班 A さんの（ももの木そだっているかな。）という文から子ねずみがしょくぶつのことをたいせつにおもっていることがわかるからです。[ももの木に着いた場面]
- ・4 班 U さんの（もう、これでおわかれだな。）というところからさみしさがつつたわるからです。

(資料⑮) Ⅲ次デジタル紙しばい後の友達のいいところ探し)

(3) 考察(成果…○ 課題…●)

視点① 教材文分析について

- 教材文の中で何度も繰り返されている大事な言葉(「ニャーゴ」など)に焦点を当てた学習課題作りを行うことで、児童の知的好奇心を喚起する学習活動が展開できた。
- 登場人物たま(ねこ)と子ねずみの行動、言ったことを比較して、心内語を考えることで、場面の様子や登場人物の行動の理由を正確にとらえることができ、登場人物(たま)の気持ちの機微を豊かに想像しながら読みを深めることにつながった。

視点② 交流について

- ペア交流を行うことで、「相手の意見を最後まで聞こう。」「相手にわかるように話そう。」とする伝達の素地づくりにつながった。話し合う素地が育つことで、全体交流では、児童一人一人が授業に参加しようと努め、相手の意見に付け足したり、質問したりすることができた。
- 話し合う目的を明確にしてジグソー学習(Ⅲ次)を行うことで、自分の読みを振り返ることができた。違った考え方をもち友達と交流を行うことで、多面的に叙述を解釈したりするきっかけとなり児童の考えの広がりが見られた。
- 効果的なペア交流になるよう、ペア交流の目的(自分の考えを伝え、確かめる・自分の考えを広げ、深める・話し合って考えを生み出す)と内容を明確にし、いつどのタイミングで行うかや、時間配分についても考えることが大切である。

視点③ 言語活動と評価について

- 振り返りでは、わかったことや楽しかったこと、友達の考えでよかったところ・言葉を書くことで学習の達成感や学習意欲を評価することができた(資料⑬)。
- デジタルかみしばいで選ぶ絵や心内語を付け加えたい叙述、叙述と選んだ絵が対応しているかどうかを評価することで児童の思考力・判断力・表現力を評価することができた。
- 低学年の言語活動によっては、心内語がまとめになるときもある。
- 主体的な対話によって付けたい力がどのように身についたか判断するためにも、低学年からまとめの表記の仕方を提示していく。